

あばら屋で資産づくり

—英国・負の遺産考—

作家

井形 慶子

70年代終盤から通い続けたイギリスに50歳で家を持った。120年以上経過したロンドン郊外にたたずむ邸宅を区分けしたヴィクトリア時代の小さなフラットだ。それまで何冊も英国人が老朽家屋に手を入れ、水回りや暖房設備を近代化して、古い建物を大切に積み次ぐ様を本に書いた。

理想の家は手をかけ、時間を経て成熟すると——。

ところが、実際に英国の家を所有してみれば、細い配水管は詰まりやすく、水漏れ苦情が下階から寄せられ、温水を部屋中に引き回して暖をとるセントラルヒーティングは止まり……と年に1度は必ず何らかの不具合が発生する。

その都度、馴染みのビルダーを呼んで修理をする。リフォーム後の保証などあってないのも、イチイチ無償で対応していたらビルダーの身がもたないからだろう。

6年が経過した今、工事費に費やした金額をはじめてため息が出た。親が知ったら金食い虫と呆れるだろう。

伝統的かつ美しい古い建物だが、内側に回れば魔物のように生きている。石の家は真夜中、ギシッと「家鳴り」がするし、天井裏からピチヨンと水滴が落ちる音もする。

だからといって、住みづらい、新しい家に買い換えたいとは思わない。「朽ちてゆくものが愛しい」のであり、「歴史を刻む住まい」が誇らしい。このような情緒的な理由に加えて、老朽住宅といえどイギリスの場合、老朽住宅が個人の資産形成に大きく貢献する絶対的価値を生むからだ。

日本以上に住宅投資が盛んなイギリスでは、約7割の人々が若いうちから家を購入し、「ハウ斯拉ダー」と呼ばれる住宅の梯子を登って行くといわれる。英国統計局によれば持ち家率も2007年度の73・3%をピークに、2011年は64%に下がったも



Profile

いがた・けいこ 長崎県生まれ。大学在学中から出版社でインテリア雑誌の編集に携わる。28歳で出版社を立ち上げ、イギリスから豊かな暮らしと生き方を考える英国生活情報誌「ミスター・パートナー」を発刊する。同誌編集長。100回を超える渡英経験を通じ書き下ろした著書は、ベストセラーになった「古くて豊かなイギリスの家 便利で貧しい日本の家」(新潮文庫)など多数。他にも『イギリス式シンプルライフ』(宝島社)、『イギリス式 月収20万円ですぐ暮らす』(講談社+α文庫)、『よみかえれ! 老朽家屋』(ちくま文庫)、『突撃!ロンドンに家を買う』(講談社)、『東京吉祥寺田舎暮らし』(ちくま文庫)、『イギリス人が知っている心を豊かにするたった一つの方法』(KADOKAWA)、『今すぐ会社をやめても困らない お金の管理術』(集英社)など。ザ・ナショナル・トラストブランド顧問。日本外国特派員協会会員。

のの、慢性的な住宅不足から家賃は高く、捨て金になると、家を買うことを資産形成の第一歩と国は奨励する。

EU離脱を問う国民投票など、大きな節目の影響は受けるものの、10年、20年と長い目で見れば、英国の住宅はゆるやかな右肩上がりです。この伝説は覆ったことがない。だからこそ、イギリス人は住まいに手を入れ、庭を美しく保ち、わが家を磨き上げる財テクに励むのだ。

この秋に出版予定の「イギリス式お金に左右されない老後のカタチ」(仮題)を執筆中、最もおののいたのは、イングランド北部ヨークシャーで畜産を営む父親が20代の娘に元家畜小屋を生前贈与した話だ。

アスベスト入りの屋根。腐り果てた内装。ビフォーの写真を見せられた私は、「なぜ父は私だけにこんな廃屋を贈与するのか。2人の姉は援助してもらい、都市部にまとも

な家を買ったのに——」とパニックになった彼女の気持ちが痛いほど分かった。堅牢な石壁のあばら屋を前に、悩み抜いた末、彼女は弁護士、家屋査定士の力を借りて、リフォーム代を銀行から借り、4年越しの改装工事を始める。通勤ばかりの教職を辞め、平穩な故郷にもどりたいことも動機の一つだ。

果たして、4年後に大地のコブのようなあばら屋は瀟洒な住まいに生まれ変わった。査定では約7千万円の値が付き、現在単身、40代の彼女の人生を包み込んでいる。

アメリカンドリームは一攫千金、イングリッシュドリームはリフォームによって手に入るといわれる。日英、住宅事情や気候風土は異なるものの、イギリス人の住宅観は日本人が悩む空き家対策、実家問題に新しい方向性を示すヒントが詰まっているように思う。

財テクのために購入したわけではないが、依然格闘し続けるロンドンのわが家も将来何らかの恩恵をもたらしてくれるのか。

老朽家屋が、負の遺産にならず、老後を支える。日本の常識をひっくり返す住宅政策を改めて知りたいと思うこの頃だ。

